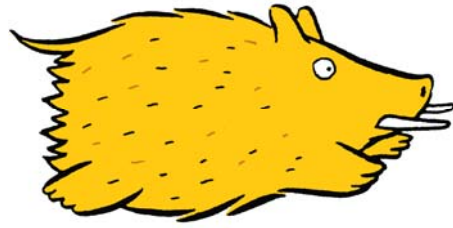




あな！アトム隊じゃあ無いのか



不老不死編

by うさお

随分と以前から矢澤さんの論の中に愛と共に、如何に老後を生き抜くかというテーマが見え隠れします。うさおも日頃はそんなことを思っても見ていなかったですが、自分にも老域の兆候が見えてくると、自分は何時まで生きられるのだろうかと言うところに思いを致すようになりました。

残り時間は後、僅かのようにも思うし、それでも老醜を晒しながら生き続けるような気もしています。若い時のような気持ちと健康状態が保てるなら長生きも素晴らしいのだけど。

とすることで、テーマは「不老不死」。太古の昔から論じられている割に解決をみいだされていないテーマです。エジプトのミイラや、日本の即身仏は来世に繋がる未来を期待したものでしょう。



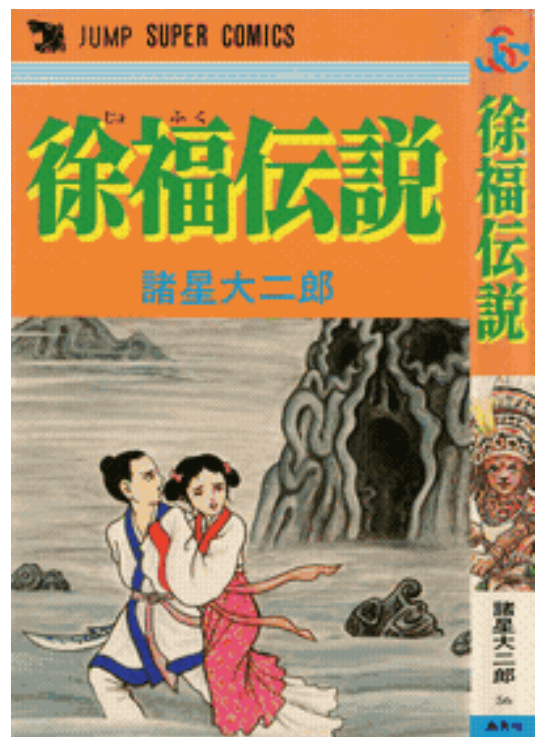
何故長く生きていたいのだろうか？ラーメンズの「アトム」の中では、冷凍冬眠した父親が同年輩になった時の時代に解凍され蘇えり、世の中がどんなに変わったかを倅に問いただす。「鉄腕アトム」に代表される思い通りの未来になったのか期待を持って問いただす。しかし、現代のあまりの普通さにながっかりして更に冬眠してしまう話だ。

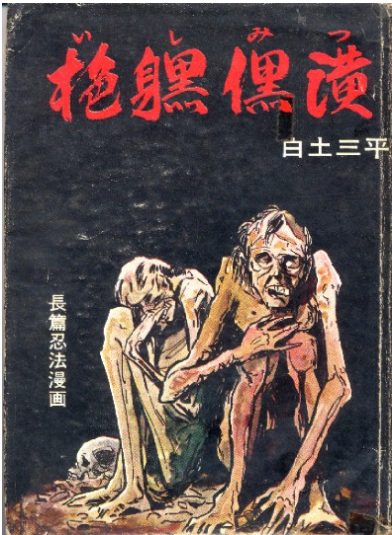
(普通じゃん、普通じゃん・・・)

秦の始皇帝は天下を取ってからは、自分の御世を永續せたいために、「徐福」に「不老不死の薬」を探しに行かせます。よほど「不老不死」を切望していたのか、「徐福」の「捜してきましょう」という言葉に載せられて若い男女2000名と莫大な生活必需品を持たせ、何艘もの船で探索することを許します。

「徐福」は東方（日本の方向ね！）に在るといふ霊山：蓬莱山（三山のひとつ、またの名を不二山と言います。方丈山、瀛州山が他の山です）を目指して出かけます。その地が日本とも台湾とも言われておりますが、その所為か日本各地に「徐福伝説」が多く残っています。

漫画会の奇才、諸星大二郎の「徐福伝説」は面白く読みました。「徐福」は自分の部族を強大な秦より逃がすために、2000名を連れていったとも言われていますが。





醍醐とは想像を絶する美味な「食材」とも「不老不死の薬劑」とも言われています。醍醐天皇だったか後醍醐天皇だったかは、その「不老不死の薬」を求め「酥」を探しに行かせます。白土三平の漫画「いしみつ」(字が難しくて当用漢字に出てきません。図を参照のこと)ではその件を、「酥」とは「酪の最高のもの」と位置づけ、異なる「不老不死の薬」として「冬虫夏草」をあげていました。

どうやら記述からすると「酪」とは今のチーズのことかなあ、冬虫夏草は冬眠している昆虫の体に植物が寄生するもので、漢方薬でも貴重なものとして扱われています。「冬虫夏草」は実際特殊な成分が含まれており薬としての効能もあるとのこと。形が不気味なので、うさおは「不老不死」にならなくても良いや。また木耳も「不老不死」の薬として扱われていたように記憶するなあ。ただし、中国では古来、白木耳と呼ばれる白い種類のものが、「不老不死」の薬劑だとされていました。うさおは食べたことがないなあ、ほとんど黒っぽいやつばかりですね。古本屋で貸本屋版のこの本を見つけた時は、大喜びでしたが自宅の引越しの際に無くしたようです。



家の近くの徐福遺跡



「徐福」と似た話に、「補陀洛」伝説があります。補陀洛とは「ふだらく」とか「ポーダラーカ」と読まれますが、「補陀洛」とは観世音菩薩が住んでいるとされる浄土、天国のこと。あれ、お釈迦様の「極楽」とは違うのかな？極楽は西方浄土に位置するとありますが、「補陀洛」は南方の海の中にあるとされています。日本では特に和歌山の「補陀洛渡海」が有名で、観音様の浄土を目指して、粗末な箱舟の中に閉じ込められて、南海を目指す僧侶たちが何人もいました。

「華嚴経」では「補陀洛は泉があふれ木々が繁



西方寺参道

り、花の香りが漂い、観音菩薩が金剛石の上に座していらっしゃる」ようでここでは永遠の時間を過ごせるとのこと。死もなく、病気もなく、苦痛もない、つまりは「不老不死」の究極です。

しかし、どうも、お釈迦様と観音様は別の種族の仏様のように感じます。「西遊記」でもお二人があまり仲が良さそうに書かれていません。お釈迦様は髪の毛が天然パーマではだけた衣を着てらっしゃいますが、観音様の髪はどうやらストレートでキリスト教のマリア様のように薄布の被り物をしていらっしゃいます。女性とも噂されておりますが、「アバロキテーシュバラ」と言うインドの神様であることは有名です。観世音菩薩、観自在菩薩とも呼ばれます。三十三観音とか多くの観音様がいらっしゃるようですが、いつか観音好きの由佳ちゃんに観世音論をしていただきたいと思っております。



藤原カムイ
釈迦無二像



藤原カムイ
観世音菩薩像



一葉観音様



湯の観音様



観音様

そんな由佳ちゃんから、ご自宅の観音様像の幾つかを送っていただきました。じんじんのお父様が温泉を掘りその地に一葉観音様を飾ってらっしゃると言うか、お湯を賜っていらっしゃると言うか、有難いことでございます。

昔、早離（そうり）と即離（そくり）と言うそっくりの兄弟が南海の孤島、補陀洛山に流され死に行く苦しみの中から、次に生まれ変わった



福厳寺の本尊様



じんじんのお母様の持佛



霊園の観音様

ら同じ悲しみに泣く人々を救っていこうと心に決めました。兄が観世音菩薩となり、弟が勢至菩薩（せいしぼさつ）となりました。じゃあ男なのかな？

兎にも角にも補陀洛山は関東にも数多く存在します。以前、七福神の時にご紹介した「補陀落山 西方寺：真言宗」は横浜市港北区の里にあります。庭の蠟梅が美しかったですね。

千葉県館山市那古にも補陀洛伝説のお寺さん、那古寺（真言宗智山派）が在ります。やはり真言宗です。日光の東照宮も有名です。東照宮の中に日光二荒山神社がありますが、奈良時代に勝道上人が男体山を見てその美しさから観音浄土にみたて「補陀洛山」と名づけたそう。な。「補陀洛」が「二荒（ふたあら）」となり、音読みして「日光（にこう）」となった説があります。こじ付けみたいですが確かにここに観音様がいらっしたと思います。お好きな人は「ニライカナイ」も補陀洛山だと言います。さて、補陀洛浄土は南海の海にあることがわかりました。徐福は東海の鳴、蓬萊山に行こうとしました。となると次の連鎖は「浦島」だと言うことに気が付きます。観音様が連れているのは白馬で、この馬は南海の竜王が化身したものですから、浦島太郎が連れて行かれた南海の竜宮城は「補陀洛山」



うさおが好きな小田原の魚籃観音。後ろから見える魚の尻尾が可愛いです。

だった可能性が高いですね。

で、浦島太郎伝説ですが、「丹後国風土記」によると、「浦島子が海に出て五色の亀を釣り、船の中に置いて眠ると、亀はきれいな女に変身する。女は自分は仙界の者で風流な浦島子に感応して来たと言い、浦島子を誘って不老不死の蓬莱山に連れて行く。彼は仙女とともに、蓬莱山で三年間 生活を送るが、その後故郷の両親が恋しくなって帰郷を申し出ると、女は別れを嘆き、もどってきたいと思うなら決して開けてはいけないと言って「玉匣」を授ける。故郷にもどった浦島子は、土地人の話によって地上では三百年もの時間が経過していたことを知り、驚きのあまりに約束を忘れて「玉匣」を開けると、若々しかった肉体は風雲とともに天空に翔り飛んでいき、浦島は鶴になり、竜宮の亀姫（乙姫）とともにめでたく暮らし、夫婦の明神として祭ら



れる。」だって。ここにも蓬莱山が出てきます。徐福伝説と補陀洛伝説が微妙に絡み合っているようです。

横浜市神奈川区に観福寺という浄土宗の寺院があり、通称を浦島寺と言いました。この寺の略縁起によれば、三浦半島出身の浦島太夫が妻子とともに丹後半島に赴任し、息子の太郎が浜で大亀を釣ります。この亀が美女に変身して太郎を竜宮城へ連れて行きます。竜宮城ですばらしい日々を過ごした太郎はやがて帰郷を願い、玉手箱と観音菩薩を与えられます。

丹後半島に戻った太郎が両親や知人の不在を知って観音菩薩に祈ると、「私を背負って関東に下れ」との夢告を得ます。三浦半島に戻った太郎は浦島の九代後の子孫に逢い、両親の眠る地を知らされますが、それが神奈川の浦島丘でした。

太郎は両親の墓前に小堂を建てて竜宮から持ち帰った玉手箱と観音菩薩を

安置し、何処かへと去っていきました。しばらくして神奈川付近の漁師は海に現れた浦島太郎と乙姫の観音菩薩護持の誓約を聞き、浦島太郎の建てた小堂を立派な寺院に建て直して観音菩薩を信仰しつづけました。浦島太郎が竜宮城から持ち帰った観音菩薩を本尊とし、亀乗聖観世音立像と浦島大明

神立像・亀化龍女神像の三像が、浦島寺が火事で焼失したため今は慶運寺に祀られています。（有鄰No. 458「よこはまの浦島太郎」阿諏訪青美）

つまりは南海か東海に蓬莱山（竜宮、常世：別名不二山）があること。その地は観世音菩薩が管理する楽園であること。不二山とは不死山のことでその地では永遠に歳を取らないか、現世の100分の1程度の時空間の中にあること。その地が日本にあるならばそこは「富士山」なのか？

そう言えば徐福のことを詳細に記した宮下文書は、富士吉田の宮下義孝家の土蔵に保管されている原書を克明に書写したものをいいます。この宮下文書は富士文書、あるいは徐福文献とも云われ、木片や石面などに神代文字で記されていました。しかし、この書を含め竹内文書・九鬼文書・東日流外三郡誌等は、これまですべて偽書扱いされてきましたが、徐福伝説は最近中国本土で史実であることが証明されましたので、ここで言う補陀洛伝説、浦島伝説もすべて史実であることが判ります。

だから、これからの半生は不老不死の薬を探すことに費やします。（大丈夫か？うさお！）



横浜市地域有形民俗文化財

浦島太郎伝説関係資料

平成七年十一月一日登録

所有者 宗教法人蓮法寺
所在地 神奈川県七島町二一番地
登録資料 伝供養塔 三基
顕彰歌碑 太田唯助作

所有者 宗教法人 慶運寺
所在地 神奈川県神奈川本町一八番地二
登録資料 本尊浦島観世音（旧観福寿寺蔵）一軀
浦島父子塔（旧観福寿寺旧在）一基
浦島寺碑（旧観福寿寺旧在）一基

横浜市神奈川区にも伝わる浦島太郎伝説は、観福寿寺に伝えられていた縁起書に由来すると考えられますが、同寺は慶応四年（一八六八）に焼失したため、縁起の詳細については確認できません。しかし、『江戸名所図会』『金川砂子』などの文献には縁起に関する記述がみられます。

それらによると、相州三浦の住人浦島太夫が丹後国（現在の京都府北部）に移住した後、太郎が生まれた。太郎が二〇歳余りの頃、澄の江の浦から龍宮にいたり、そこで暮らすこととなった。三年の後、澄の江の浦へ帰ってみると、里人に知る人もなく、やむなく本国の相州へ下り父母を訪ねたところ、三百年前に死去しており、武蔵国白幡の峯に葬られたことを知る。これに落胆した太郎は、神奈川の浜辺より亀に乗って龍宮へ戻り、再び帰ることはなかった。そこで人々は神体をつくり浦島大明神として祀った、という内容です。

この浦島伝説が伝わっていた観福寿寺の資料は、同寺とゆかりの深い慶運寺（神奈川県神奈川本町一八番地二）と、大正末期に観福寿寺が所在した地に移転してきた蓮法寺（本寺）に残されています。

蓮法寺の供養塔三基は、若干の欠損と近年にいたって手の入った形跡が認められますが、浦島伝説を今日に伝えるものです。



〔江戸名所図会〕



伝供養塔



顕彰歌碑

横浜市教育委員会